

編集後記

長谷川和夫医師は、認知症診断のための「長谷川式簡易知能評価スケール」を考案したわが国における認知症医療の第一人者である。そんな長谷川医師自らが認知症に罹患した。これまで多くの認知症患者に、疾患への向き合い方を説いてきた彼は、テレビ番組で「自分が認知症になって初めてどんなにそれがつらいかがわかった」「医者とは患者の苦しみを知りもしないで、わかったようなことを言うもんじゃない」と言っておられた。

筆者は昨年秋より腰椎椎間板ヘルニアを発症した。MRIでは、右のS1神経根直下に突出しており、見るからに痛そうなヘルニアである。実際、発症当時は歩行もままならないほどの激痛にみまわれた。NSAIDsはもとより、神経障害性疼痛治療薬Lもほとんど無効であり、オピオイド製剤Tが若干の効果があつたような気がする程度である。神経根ブロックも受けてみたが、まさに地獄に落ちるような痛みであった。筆者はこれまで、曲がりなりにも脊椎・脊髄外科をサブスペシャルティーとし、幾多の患者に「椎間板ヘルニアは保存療法が原則です。多くの場合は自然と良くなります」とか「腰痛には安静は逆効果です。むしろ活動性を維持しましょう」とか「痛みとはうまく付き合っていくことが肝心です」などと、今思えば、長谷川医師ではないが、よくも「わかったようなこと」を言ってきたものだと思う。今回、還暦にして身をもって患者の痛みを知ることとなったわけだが、これも神の思し

召しというやつかもしれない。優等生的な言い方になるが、この経験を今後の診療に生かしていかねばならないのだと思う。コンドリアーゼ椎間板内注入療法を受けて痛みはやや軽減したが、発症から約3カ月経過した現在、右下肢痛は残存している。症状の好転を祈りつつも謙虚に自分の症状と向き合っていくつもりである。

今月号の特集は、牛田享宏教授のご企画による『医療におけるAIの活用』である。AIに関しては、それを称賛し期待する声と、危惧を抱き警戒する声が相半ばしているようである。AIを恐れる声の背景には、「いつか機械やロボットが意志や感情を持ち、人間を支配するのでは」というSF小説まがいの空想が少なからずあるようだ。しかし、少なくとも現状では、AIを使うための前段階の条件設定や、AIが導き出した結果の解釈には、人間の力や判断が必須であるケースが多いようである。人間の無用な労力の削減や、人間の単純ミスによる事故防止などにおいてこそ、AIの威力が最も発揮されるのだろう。医療に関しても、画像診断、病理診断、発症予測、診療支援など多様な分野でのAI活用の可能性が本特集において示されている。AIが真に人間にとって有益で恩恵をもたらすものとできるかどうかは、実はそれを使う人間の力量や態度次第なのだと言えるのかもしれない。

(山下敏彦)

「整形・災害外科」第62巻 第3号 (3月号) 2019年3月1日発行 (毎月1回1日発行) 定価 (本体 2,500円 + 税) 年間購読料金 定価 (本体 39,400円 + 税) 〔年間13冊 (臨時増刊号、増大号を含む) の誌代〕 〔年間予約購読者に限り送料無料〕	発行所 金原出版株式会社 発行者 福村直樹 〒113-0034 東京都文京区湯島2-31-14 TEL 03 (3811) 7165 [編集室直通] TEL 03 (3811) 7184 [営業部直通] FAX 03 (3813) 0288 http://www.kanehara-shuppan.co.jp 振替口座 00130-1-191269 印刷所 三報社印刷株式会社 広告申込先 日本医学広告社 TEL 03 (5226) 2791
---	---

・本誌に掲載する著作物の複製権、翻訳・翻案権、上映権、譲渡権、公衆送信権 (送信可能化権を含む)、貸与権、二次的著作物への利用に関する原著作者の権利は、金原出版株式会社が保有します。

・**JCOPY** <出版者著作権管理機構 委託出版物>

本誌の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。複製される場合は、そのつど事前に、出版者著作権管理機構 (電話 03-5244-5088, FAX 03-5244-5089, e-mail: info@jcopy.or.jp) の許諾を得てください。